

## 「満洲国」幻想行

― 僕を研究にいざなつたもの ―

玉置文弥

「満洲国」の残骸たちに見た「幻」

今年（二〇二二年）で「建国」から九〇年を迎える「満洲国」（以下、括弧無し）の残骸たちに直接出会つたのは、三年前の暑い夏のことであつた。歴史学・中国近現代史を専攻する大学院生として、吉林省長春の東北師範大学に留した僕は、宿舎に落ち着くや否や、その街で今も何らかの役割を与えられ「蘇生」していた残骸たち―主に満洲国政府関係、銀行、商社など街に点在する建物―を、ただ無心に、それでいてやや興奮気味に訪ね歩いた。

一つ一つ書いていけばきりがなが、とにかく留学中は満洲国の残骸に会うために、授業の暇をみては、長春だけではなくその旧領域たる

中国東北部の様々な場所―哈爾濱、瀋陽、大連、撫順、延吉など―へ赴いていた。

しかし、僕はいつたい、なにを興奮していたのだろう―。

日本の侵略の爪痕を、この目に焼き付ける。そのことは、大前提として常にあつたはずだ。しかし、もしもそれだけが目的だったのなら、興奮とはならなかつただろう。むしろ陰鬱な気持ちが見えぬふりをして通りすぎ、日本より圧倒的に発達したスマホのいろいろなサービスを使ひ、また庶民的で熱情的なその街の人々の温かさに触れて愉悅に浸り、中国語の勉強にいそむ、といったあたりが関の山だったろう。

しばしば満洲国は「幻の国」と呼ばれてきた。それには日本の傀儡国家だから真の「国」ではないという意味も含まれようし、「建国」後一五年足らずで消えたためにそう言われたのかも知れない。いずれにしても、その「幻」を―興奮とともに―見たいと僕は思ったのであるが、「幻」が何なのかわからないまま「幻」を見ることを果たす、という不可能で不可解なことを遂げるためには、やはり当時の建築物を訪ね歩いていくほかなかった。

しかし、「無」が有る」という撞着の言葉を想起させるような、「幻」を見る」ということなどは、結局のところ僕の思い込みでしか達成されない。つまり、その「幻」に何かを仮託し、そして実際にそれを見たのだと僕自身が主張することなしに、そのようなことがありえる筈は無いのである（と思っていた）。完全に自己満足の世界である。そういえば昨今、いわゆる歴史修正主義的で、満洲国を賛美するような本や言説がよく見られるが、それもその一種なのだから。

う。侵略の実態を無視し、「建国」によってこれだけ近代化が進んだとか、現地の人々を解放したとかいった、あれである。

では、それと僕のとにはいったいどのような違いがあるのか。単なる自己満足で、かつ侵略者の子孫（事実僕の曾祖父は戦前、文部省の役人として「滿蒙開拓青少年義勇軍」送出に尽力し、また満洲国を訪問して国務総理鄭孝胥らとも面会していた）として興奮している点では、変わりがなく、同じ穴の貉なのではないか。たとえ歴史学を専攻し満洲国の研究を把握し、学術的な知識を得、どれだけ侵略の実態を認識していても、満洲国の残骸を見てそれに一抹の誇らしささえ感じてしまっている自分が（！）、どうしようもなくそこにはいた。

当時僕は長春の「偽滿皇宮博物院」（満洲国皇帝の溥儀の住まい）を訪ね、次のように日記に記している。

もし、「満洲国」が続いていたなら、どうなっ

ていたのかとしばし考えた。もちろん、日本の侵略行為であり、正当化することなどできようはずもないのだが、しかし、もしつづいていたら……もつと続きを見てみたかった、と思ったりした。

これは、「満洲国」が続いていたなら」という歴史のifを学術的に考えたい、ということでは、明らかに、ない。むしろ、そのifが実現していたらどうなっていたのかを「見てみたかった」などという、まったく勝手に「侵略的」「歴史修正主義的」な夢想ともみえる。当時僕はそういった感慨を、愚句で恥ずかしいかぎりだが、

此処に生き 此処に斃れし人達の 御魂安か  
れただ祈るのみ

旅終えて 一人で偲ぶ過去らへの 悲しみと  
いか何というのか

といったふうに詠んでいた。そしてどこを訪れ

ても「ああ、みんなここに居たんだなあ」と感じた、と綴っていた。建築物を見、触れられたこと、すなわち建築物を媒介とすることで、侵略者としての日本人が確かにそこに在ったと確認できたと思ひ、そして過去にそこで生きていた人々の「熱」に出会えた気さえしていた。決着のつかない感慨に、僕は、戸惑いながらも――当時の僕の主観的理解では学術からは遠いところのどこかに――着地点を見つけようとしていたのかもしれない。

しかし、この夢想や興奮はなんなのか、なぜこんな感慨が湧いてきてしまうのか。たぶん「歴史とは何か」という問いにつながる、このある意味でナイーブな疑問はやはりそう簡単には収まらないだろう。また収まってよいはずもない。

僕はとても悩んだ。笑われるかもしれないが、それほど僕にとつては本当に大きな問題だった。それは今考えれば、日本の中国への侵略という過去をどのように捉え、考え、継承していくかということである、ときれいに言えるようなこ

とだったかもしれない。が、当時は自らの感慨を、そのような性格の問題として冷静に考えられるほど、知識も、知恵も、感覚も持ち合わせてはいなかったし、そうであるのもまた嫌だった。

そうして、どれだけ満洲国の残骸たちを訪ねても、その前で何も出来ないまま立ち尽くす自分が居ることに気づいたとき、長春の街は、今や寒いというより痛い、白い冬の空間へと変わって果てていた。

## 二人の思想家との出逢い―「歴史」とはなにか

このままでは「幻」を見ることは出来ない――。それまで歴史研究をしているつもりになっていた自分の中のなにかが、歴史というものの圧倒的な存在を前にして、崩れ落ちそうになっていた。そもそも「幻」を見たいということ自体がおかしなことだったのか（いや、おかしいかもしれない）。当たり前に学んできた歴史が、いま、妙な生温かさとともに迫ってくる。

当時、「あなた」はどこにあるか？」という

問いを、ある人に与えられたことがある。臆面もなく「歴史」と答えた僕の念頭にあったのは、たぶん、過去につらなる存在としての自分、というようなことだったと思う。しかし、すでに書いてきたようにその時は彷徨の最中だったから、その意味が理屈ではわかっていても、まだ感情のほうではちゃんと受け止め切れていなかっただろう。

それでもまがりなりにもそういう考えを持ったのには、ある人物の存在があった。

その人は、西部邁である。

西部は、保守派の論客として著名だが、僕は何よりも彼の「言葉への畏怖」というもの、そしてその真剣さに魅了された。晩年は、確かに右派的な発言をしており、その点相容れない部分もあるが、しかしこの人の語る言葉たちに僕は目を見開かされる思いだった。特に歴史についての深い洞察である。西部は次のように言う。

容易に見てとれるように、保守主義は人間

の完全可能性（パーフェクティブリティ）を信じない。それは人間が知的にも道徳的にも不完全であるという前提から出発する。保守主義が頼りにするのは伝統であるが、伝統は持続（デュアレイション）あるいは時効（プリスクリプション）の成果として成立し、そこには歴史をつうじるさまざまな慣例（コンヴェンション）が蓄積されている。伝統を支点とすることによって、不完全な人間および社会が平衡を維持することができると思なすのである。（西部邁、一九八五）

ここで保守思想についてうんぬんする必要はないが、僕は西部の言うそれに膝を打つ思いだった。僕は歴史にさおさされた存在としてしかありえないのだ、と。だから僕は、「歴史に存在する」と答えたのだろう。その意味でならば、歴史をつかめるかもしれない、そう思った。西部はさらに、違ふところで歴史の意味について述べている。

歴史的経験とは、人々の言語的葛藤における成功と失敗の積み重ねのことである。その経験は、いかなる具体的状況のなかでいかなる具体的決断が行われ、それが言語上の葛藤を平衡させるのにいかなる貢献をしたのかの豊富なりすとを保蔵している。（西部邁、二〇一三年）

そうなのである。「歴史的経験」は、「成功と失敗」の「豊富なリスト」だったのだ。

なにもこのようなことはいまさら改めて説明するまでもなく、長らく言われてきたことであって、目新しいものでもなければ力説するようなことでもない。ただ僕はここで、この西部邁という存在に大きな影響を受けたということ、そしてその思想が大きなヒントになったことを言っておきたかったのだ。

しかし、そのことを頭ではわかっているが、僕の見ようとした、侵略という厳然たる事実とそれに反するような僕自身の興奮の中の

満洲国の「幻」、をとらえるのには、まだだいぶ距離があるように感じられた。過去が「ただ在ったのだ」という感慨を、越えられなかったのである。

そんな時もう一人の思想家は、ものすごい迫力の相貌で、鋭く登場した。

竹内好である。

竹内は膨大な文章を残しているが、満洲国については、「日本帝国主義の侵略という側面と、その侵略を通して、あるいは侵略にもかかわらず、事実として否定しがたい理想の側面」（竹内好、一九八〇）があるとした。現在では常識的となつているこの捉え方も、僕は当時、頭ではわかつていた。しかし残骸たちの前ではそうはゆかないのだ。

竹内はさらにそんな僕の頭から身体に降りてくるように語りかけた。

（欧米への抵抗と、そのためにアジア諸国の連帯を目指したという側面もある―引用者）

対等合邦（日韓合邦。結果的には日本の一方的な韓国併合となる―引用者）という主張そのものは、空前にして絶後の創見だが、心情としては引きつがれている。そして全体としては不純な動機と、欺瞞にみちた「満洲国」のなかに暁の星ほどには隠顕している。（竹内好「日本のアジア主義」『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三年、三二二頁）

抵抗・連帯としてのアジア主義が、満洲国にも「暁の星ほどには隠顕している」というのだ。「暁の星」は、竹内の言う満洲国の「理想の側面」である。竹内はさらに、その「理想」が完全な侵略となつた歴史の現実にも、当時のアジア主義者が学ばなければならなかったとするが、それは現在の日本人にも投げかけられているものだろう。

そうか、侵略でありながら理想でもある満洲国という存在の所以はここにあるのか。そしてその問題を今の人間が考える必然性があるのか。

ようやく感情が、理屈に少しだけ追いついた



気がした。そして僕が見ようとしていた「幻」にぐっと近づいた気がした。

しかしそのことは、同時に苛烈で凄惨な日本の中国侵略の実態を、矮小化させるどころか、これまで以上に際立たせる契機となつて、僕に迫ってきた。哈爾濱の「侵华日军第七三一部队罪证陈列馆」、瀋陽の「九一八事变历史博物馆」、撫順の「平顶山惨案纪念馆」「抚顺战犯管理所」……。思ひ出せばまだまだあるが、ここで見た日本の侵略の爪痕たちは、あたかも「幻」の光で鮮明に映し出された影となつて動き出し、反対に「幻」をかき消してゆくようだった。僕が近づいたと思つた満洲国の「理想の側面」もまた、それに撃たれて脆くなつていくようだった。

その時、目の前に聳える残骸たちが、急に語りかけてくるようになった。慄きながらも、今までのように見よう見ようとするのではなく、耳をすましてその声を聴こうとする姿勢が、いつの間にか身に馴染んでいた。ようやく日本の侵略というのが悶えるような苦しみとともに認

識出来てきた。それが侵略者としての日本人であるからその傲慢であると十分に了解しながらも、同時にその「理想」も見なければならぬということなのだ、と得心した。

どこかにたどり着いたのかもしれない……。そう思った。

旅の終わりとはじまり

——「幻」から「満洲国」研究へ

そういえば西部邁は、竹内好を「ナシヨナリスト」だと言っていた。だが、竹内はナシヨナリティについて「具体的に述べることをしない」にもかかわらず、彼の「本気の」アジテーション「大東亜戦争と吾等の決意」のように、ナシヨナリティを「感情過多と言われて致し方ない口振りで語る」ために、それが竹内を「ロマンチック・ナシヨナリストにみえさせる」のだ、とも言っていた（西部邁、一九九一）。僕がそういう「ロマンチック・ナシヨナリスト」としての竹内に魅せられた部分も大いにあったことは、本場で

ある。先に挙げた満洲国の「暁の星」という言い方にも、その要素がなかったとは思わない。

しかしたとえそうであったとしても、いや、そうであるからこそ、その本気の言葉たちは、残骸を訪ね続けて感じた「一抹の誇らしさ」や興奮や夢想が、満洲国の「理想の側面」であり、そして見ようとした「幻」とはまさしくそれだったのだと、僕に気づかせてくれるのには十二分過ぎた。「幻」に僕が何かを仮託しようとしたのではなくて、過去に侵略者としての日本人が「理想」として満洲国に賭けようとしたものを見ようとするのが「幻」を見る」ことであり、そのことを僕は残骸を媒介としてやろうとした。だから興奮や夢想が激発した、ということだったのではなかったか。そしてその時、凄惨な侵略の実態が身をもって分かってくる――。それは、なにも僕に起きた特別なことではなく、西部邁が気づかせてくれた歴史的存在としての人間ならば、ある意味で当然に起こりうることだったともいえる、と思う。

成功と失敗の豊富なりすととしての歴史的経緯と僕を僕たらしめている歴史は、まもなく僕をして、満洲国の「理想」と、そこにおける厳然たる侵略の事実とともに、研究に向かわせることになるだろう。過去としての満洲国は、僕にとつて、今や歴史として現代的な存在となるだろう。その時、「幻の国」は、どのような顔で歴史を生きる僕を見ているだろうか。

この長かった旅路は、「中国」という現在に続いている。道は険しく、これからも、途轍もなく長く、長く、続きそうだ。

#### 【参考文献】

西部邁、一九八五、『幻像の保守へ』『進歩主義の末路』文藝春秋。

西部邁、一九九一、『思想史の相貌』『異人としての民族主義者』世界文化社。

西部邁、二〇一三、『保守の辞典』『伝統』幻戯書房。

竹内好、一九八〇、『竹内好全集』（第四巻）「満洲国研究の意義」筑摩書房。

竹内好、一九九三、『日本とアジア』『日本のアジア主義』ちくま学芸文庫。